

佳作

母からのプレゼント

東京都 東海大学菅生高等学校二年 松元 千尋

私には三人の兄弟がいます。二十二歳の兄と二十歳の姉と二歳の妹です。私が中学三年生のときに突然現れた妹は、私に膨大な影響を与えました。

三年前の秋、私はいつものように授業を受けて部活動をしていました。その日の部活動の終了間際、兄が急に私のところに来てきて、

「ありえないことが起きた。」

と言いました。私がかと聞いても兄は家まで何も教えてくれませんでした。私は宝くじでも当たったのかと思いつつ家に帰ると、母はにやけながら私に

「赤ちゃんができましたー。」

と言ってきました。当時母は四十五歳だったため、私はとても信じられませんでした。むしろ宝くじではなくてがっかりでした。そんな私の内心を察しなくても新しい子供が生まれたかのような勢いで妊娠の詳細を語り始めました。当時検診で子宮に七センチと六センチのとても大きな子宮筋腫が見つかった母は歳も歳であっ

たため手術までしなかったものの、お腹の張りを感じたとき筋腫が大きくなっているのかもしれないと思って病院に行きました。そして筋腫と筋腫の狭いところに妹はいました。しかし、筋腫がある中で赤ちゃんが大きくなるのは難しいし、医者からも母の歳では五十パーセント以上が流産すると言われたため、家族の不安は大きかったです。私は正直怖かったです。妊娠がどれだけ大変なことなのか予想はできても、実際はどんなものなのか全くわからないし、母の歳で子供が生めるわけないと思っていました。生まれたとしても、障害をもっているのではないか、何か病気をもっているのではないかといった不安もありました。そんな中でも、妹は筋腫を押し上げながら着々と大きくなっていきました。

しかし、妊娠六カ月を過ぎたころから母の体に異変が出てきました。母に激しい頭痛や吐き気が襲いました。妊娠高血圧症候群でした。この病気は母体と赤ちゃん両方に危険が伴う妊娠中、最も注意を払いたい異常であるということ母は入院しました。このときは私も含め、家族皆、無理かなと思いました。これまで安産を期待できていた分、精神的ダメージが大きかったです。

入院を経て無事に母がお腹を大きくして帰ってきたあとは、衝撃の毎日でした。学校から帰ってくると家にベビーベッドが置いてあったり、机や椅子の角にはゴムでできたものが付けられました。それと同時にもう

すぐ赤ちゃんが家族の一員として私たちの前に現れるという実感が湧いてきました。母のお腹に手を当てると数カ月前まで脂肪だらけだったお腹が固くなっていて、たまに中から蹴られたりもしました。私が母のお腹に手を当てたとき、母が私に

「この子は空の上から見ていて、この家に来たいと思って私のお腹に入ってきたんだって。」

と、まるでお腹の子とも会話をしているように言ってきました。

そして二年前の七月二十八日。私は塾で夏期講習を受けていました。父から無事生まれたと連絡がきて、すぐに家に帰り、兄と祖母と一緒に病院に行きました。ガラスの向こう側にいる妹はまるで天使のようで、その小さい体で私に今までで一番大きい感動を与えました。妹が母のお腹から出て我が家に帰ってきたとき、

「心配しなくて良かったのに。私はしっかり元気で生まれてくれたから。」

と言われたような気がしました。

今は本当に心配しなくて良かったと思っています。妹は食欲旺盛で自分のご飯を食べたあとに私のご飯を奪おうとするほどです。また、最近は言葉も覚えてきて、私が学校から帰ってくる時、

「おかえりなさい。」

と玄関まで走って来てくれます。どんどん新しい言葉を

吸収していて、その一つ一つに日々感動させられています。これからも、妹の成長が楽しみです。